犯罪捜査共助規則に基づき、全国へ交付される指名手配書には計二種類が存在している。人間の顔写真や氏名が添付されたものと、異能の情報が書き足された幻想人（フェアリスト）たちのものだ。

事件は、そんな手配書に張り出された一枚の写真から始まる――――

◆◆◆

通報者は何処にでもいるような中年のタクシードライバー。彼は降り出した雨に「今日は客足が増えそうだ」とほくそ笑んんで、駅の辺りを軽く流していた。

すると、案の定一人の少女がタクシーを停めたのだ。全身がズブ濡れで、表情も目深に降ろされたフードで定かではない。

（妙なガキだな……）

ドライバーは少しの違和感を覚えるも、そのまま彼女を乗せることにした。

「けど、一体どうしたんだい？　こんな雨の中を一人でさ？」

「……」

「もしかして家出とかかい？　だったら悪いことは言わないからさ」

「……」

少女は最低限の行き先を告げたっきり、黙りこくっている。いくら話題を振っても応えようとしない。

まさか、このご時世に時代遅れな幽霊を乗せてしまったんじゃないか？　とドライバーが勘繰るのも束の間だった。

バックミラー越しにほんの一瞬見えたのは金と銀の双眸。

「……!?」

ここでドライバーがただの冴えないドライバーであれば、事件はここで終わっていた。

だが、彼は三年前にとある幻想人によって妻と息子を惨殺された過去を持っていたのだ。

「お前は……もしかして……」

家族を殺した幻想人は警視庁によって捕縛され、収容所送りにされたと説明を受けた。ただ、それで理不尽に大切な人を奪われた憎しみが消えるわけじゃない。

だからドライバーは幻想人の起こす事件に敏感だったのだ。交付された手配書に載せられた幻想人たちの顔だって当然、全て覚えている。

「連続小児誘拐殺人事件の――――」

◆◆◆

パトランプをギラつかせながら、〈ウルフパック〉の群れが街を疾駆する。白黒の装甲は雨滴を弾き、鋼の警察犬たちは己が標的を求めていた。

一般車両に開けてもらった道を扇動するのは辰巳（たつみ）の一号車だ。その後ろを二号車、三号車と警視庁特務課・幻想人対策班の総員が続く。

当然、最後尾には十三号車を駆る華怜（かれん）の姿もあった。

『各員に注ぐ。ターゲットは通報者のタクシーを横転させた後、この周辺を逃亡している可能性が高い。なんとしても警察の威信にかけても捕らえてみせるぞッ！』

『了解！』

「りょ、了解！」

華怜は少し遅れて応答しながらも、車両のセンサー系に目をやった。

幻想人たちは超常的な力を備えるほかに、絶えず自らの内側から固定の電波を発することが確認されている。

何故そんな性質を持つのかは不明だが、これは幻想人たちを追跡する上で一つの明確なアドバンテージだ。〈ウルフパック〉たちの鼻先には電波を受信するためのセンサーと、それを逆算し居場所を割り出すための演算装置が埋め込まれているのだから。

だが、十三号車のセンサーが幻想人の反応を捉えることはない。

「やっぱり厳しいか……」

恐らくはこの雨が、電波を拾う妨げになっているのだろう。華怜自慢の嗅覚も匂いが流されてしまえば使い物にならない。

ならば逃亡中のターゲットを捉えるには、目視に頼る他ないのか。

『このまま全員で探し続けても埒が開かないな……よし、今から班を四分する！　各班、三人一組でターゲットを散策するぞ。あと余った大上巡査部長は俺たちのフォローに回るんだ』

それはきっと、まだ十三号車に慣れていない華怜への配慮だった。

「私だって、やれるのに……」

『何か言ったか？　この雨のせいで、音声が聞き取りづらいんだ』

「いえ、何でもありません！」

対策班は辰巳の指示通り四つに分かれ、それぞれが割り振れた区画の散策を開始する。

けれど、華怜は今更ながらにターゲットの詳細を聞かされていないことに思い至る。辰巳から緊急出動の伝令を受けるまで、十三号車のシミュレーターに没頭していた自分に非があるのは明らかなので苛立ちはないが、それでも現状は少し奇妙であった。

現れたのが並の幻想人であれば、それに適した装備を備える〈ウルフパック〉のドライバーが選抜され出動することになる。

だが、今回に限っては対策班のみならず、交通課や捜査一課にも声が掛かり、街中に厳重な包囲網が敷かれているのだ。

ならば、ターゲットは警察の威信にかけてでも捕らえなければならない危険個体か。華怜

の頭を過ぎるのは「竹林抗争事件」を引き起こしたかぐや姫を筆頭に、凶悪な幻想人たちの名前ばかりだった。
「辰巳警部。私たちの追っているターゲットについて詳細な情報を求めます」
『今更何を……って、伝えて損ねていたのは俺のミスか。だったら、よく聞いとけよ。今俺たち追跡中のターゲットは、あの小児連続誘拐殺人犯の』

「赤ずきん」――――その名を聞いた華怜の目の前が、真っ赤に染まりかけた。

ほんの一瞬でフラッシュバックしたのは、忘れがたき過去の経験だ。あの真っ赤なケープも、銀と金の双眸を歪めて作った下卑た笑みも、忘れることなんてできやしない。
十年間憎み続けた、あの仇敵が自分のすぐ側にいるかもしれないのだ。その事を理解した華怜が思考を切り替えようとした途端、
『おい、大上！　ちゃんと聞いてたか？』
叱責する辰巳の声が、華怜を辛うじて現実に引きとどめる。自身でも頭に血が昇りかけていた事を自覚し、冷静であろうと務めた。
「深呼吸……深呼吸よ、私」
そうだ、怒りは時に判断を鈍らせる。あくまでも思考はクリアーに保ち続けろ。
赤ずきんの備える異能は「血液操作」であると、データベースには記録されていた。愛用のマスケット銃に込める弾丸にも血液を付着させる事で弾道を制御させたり、血の付着した箇所を爆破させたりと、その応用幅も多岐に渡る厄介な異能だ。
「幻想人は超常的な再生力も備える故に失血の心配もない……だとしたら」
もしも自分が赤ずきんなら、その異能を用いてどのように逃亡するか？
華怜はそのように思考を切り替える。そして――――
「辰巳警部！　車両の周囲だけでなく、頭上を警戒して下さい！」
『頭上だと？　赤ずきんの異能は空を飛べるようなものじゃないはずだぞ』
「いいから！　彼女ならきっと！」
一号車が渋々ながらも足を止め、背部に背負った遠距離狙撃モジュールを頭上へと展開する。
その先端に備えられた高性能カメラなら、この土砂降りでもターゲットの姿を捕捉できるはずだ。
『ん……？　何だ、アレは……？』
一号車のカメラの捕捉した映像が、他の車両間にも共有された。画面越しに見えるのは、ビルとビルの間を跳躍する人影。工事現場で使われているようなブルーシートを被ることで自身の姿こそ包み隠しているが、その指先からは真っ赤な糸が放られる。
糸の先端は、そのままビルの壁面へと付着。人影はそれを手繰り寄せることで、ワイヤーアクションさながらにビル間を渡っているのだ。

「きっと操作した血液をワイヤー状に引き伸ばしているのでしょう。彼女が備える異能なら、ワイヤーの射出方向も巻き取りも思うがままですから」
仮にも人型をした存在が、まさか自分の頭上を蜘蛛のように渡り歩いているなど誰が想像できるだろうか？
『なるほど。あの高さで逃げていたのなら、捜査網に引っかからないわけだ』
こうしている間にもターゲットはどんどん距離を離していく。これ以上距離を離されてしまえば、いくら〈ウルフパック〉と言えど、追い付くのは困難だ。
『こちら一号車、ターゲットを捕捉した。このままの追跡は不可能と判断した故、狙撃体制に移る。各員は落下予測ポイントの避難誘導と警戒を』
「いいえ、それには及びませんッ！」
一号車が後ろ脚を変形させ、反動抑制用のアンカーを突き立てようとした。
だが、それよりも速く華怜の十三号車がスタートを切る
『なっ……大上⁉　何をするつもりだッ！』
「辰巳警部の狙撃の腕は知っています。だけど、この悪天候じゃどうしたって命中制度は下がるはず。だったら私が直接身柄を押さえた方が確実です！」
極限まで車体重量を削った十三号車であれば確かに、開いてしまった距離を席捲し、ターゲットへ追い付くことも可能だった。
だが、辰巳だって勝手なスタンドプレーを許容することは出来ない。
『無茶をするな、戻るんだッ！』
「無茶じゃありませんッ！　私のドライバーとしての腕を信用してくださいッ！」
その剣幕は通信機越しに噛み付かんとするものだった。
この絶好の機会を逃すわけにはいかないのだから。
『わかった……なら直接的な交戦は避けて、ターゲットの足止めだけに専念しろ。すぐに俺たちも追い付いてみせるから』
返ってきたのは苦虫を噛み潰すような、それでも華怜を肯定するような返事だ。
『それから……』
「それから、何です？　雨音でよく聞こえないのですが」
『それから、必ず無傷で戻れ、大上巡査部長ッ！　お前は俺の大事な部下なんだからッ！』
「あはは……善処させていただきますよ」
低く響いたエンジンのアイドリング音は、獰猛な獣の唸り声を思わせた。
そのまま華怜はペダルをキックダウンし、さらに車体を加速させる。

06

赤ずきんが初めて警視庁のデータベースに登録されたのは一〇年前。被害者となった男児を拉致するまでの一部始終が監視カメラに残っていたのだ。

その男児は後に皮を剥がれた状態で発見され、近くの山荘からは人皮で仕立てたと思われる衣類が押収された。
自分のように両親共々巻き込まれた事例もあれば、姉妹の遺体をツギハギにした剥製が発見された事例もあった。

きっと彼女は気取らずにはいられないのだろう――――自らが優れた「狩人」であると。

だが、増え続ける被害者の数に反し、彼女に纏わる情報はここ数年で極端に少なくなっていった。監視カメラが彼女の姿を捉えることもなければ、彼女の内側から発信される固有の電波を街中に設置されたスキャナーが観測することもない。
それでいて彼女が殺したと思われる変死体と空薬莢だけが不定期に発見される。遂に行き詰まってしまった刑事の中には、「彼女が赤ずきんから透明人間になってしまったのではないか？」と本気で疑うものが出るほどだった。
そんな赤ずきんが。――――一〇年追い続けた仇敵が、自分のすぐ目の前にいるのだ。
「待てッ！」
華怜（かれん）は十三号車のモニター越しに、ビル間を渡る赤ずきんの姿を補足する。
果たして自分はこの瞬間をどれほど待ち焦がれていたのだろうか？　備え付けのシミュレーターを駆使し、幾度となく彼女との追走劇を疑似体験してきたのだって、全てはこの時のためなのだ。
「絶対に逃さないッ！」
赤すぎんも追跡者の気配に勘付いたらしい。その身を軽やかに空中で翻すと同時、懐からマスケット銃を引き抜いてみせた。雨の中、爆ぜた銃口炎（マズルフラッシュ）は異様に際立つ。
まとも照準も合わせぬまま撃ち出された弾丸は、常識の範疇であれば明後日の方向に飛んでいくのだろう。
だが、それを操るは御伽噺から生れ落ちた怪物だ。弾頭に仕込まれた血液がルートを修正。異能の元で制御された質量塊がデタラメな軌跡を描きながらに十三号車に迫った。
「チッ……！」
両脇の車線には一般車両が走っている以上、下手な回避はできない。それが彼女の異能の制御下にある以上、あの弾丸は十三号車の急所を穿つまで止まらないはずだから。
ならば、どうするか？
華怜はアクセルをブリッピングしつつ、シフトダウン。軽やかに減速しつつ、敢えて車体の曲面で弾丸を滑らせた。
「これならッ！」
弾丸は十三号車の脆弱な装甲を擦過する過程に運動エネルギーを損なわれ、そのまま落

下する。爆ぜ散った火花もまた雨滴に呑まれ、容易く消えていった。
シミュレーター内で何度も試し続けた彼女の異能対策だ。そのままアクセルを煽り、機械仕掛けの四脚を再度加速してみせる。
「予行演習はバッチリなの」
実際の赤ずきんの迎撃は、ＡＩが予測したもの以上に複雑怪奇な軌跡を描いた。それでいて、マスケットを抜いてから着弾までのタイムラグも、演算されたものよりコンマ数秒ほど速い。
だが、華怜の動体視力はその弾道を寸分違わず捉えた。プロのレーサーが的確なコーナリングを見極めるように、自分に迫る死線（デッドライン）を全て見切ってみせたのだ。
加えて赤ずきんのマスケット銃は、次弾の装填にボルトアクションを要する。初撃の弾丸を掻い潜った以上、その隙は華怜にとって反撃のチャンスだ。
「今度は私の番だッ！　十三号車、セーフティ解除ッ！」
華怜の声に十三号車も応えた。仕込まれたサブアームが展開され、磨き抜かれたブレードがパトランプの紅を乱反射させる。
そして背後脚の一部に亀裂が走り、内から推進器（ジェットブースター）が露出した。十三号車の四脚がアスファルトを蹴り上げて、跳躍。さらにブースターの爆発的な推力が車体を無理矢理に飛翔させた。
排気口から噴き出した蒸気と蒼炎を纏う様は、まさしく毛皮に覆われた狼を思わせる。
「絶対に逃がさないんだからッ！」
十三号車の配備が今日まで遅れてしまったのは、ブースターと排熱システムの調整に苦難したためだ。
そうして完成された十三号車は、華怜の要望を叶えるために余分な装甲を廃し、代わりに外気を取り込む為の吸気口を各部に備えていた。それによって取り込まれた外気を一度圧縮、燃焼させることで加速を生むまでがブースターの大まかな用途だ。
「うぐッ……！」
無論、そんな急加速をしては相応の負荷が付随する。耐Ｇ性能を備えたアシストウェアを纏って尚、無効化しきれない重力が華怜を襲った。全身が物理法則による反動に締め付けられ、内臓が捻転するかと思えた程だ。
それでも、一度握り締めたハンドルから指が離されることはない。
「ッッ……！　この程度の負荷がなんだって言うのッッ！！」。
それどころか、十三号車の爪先はビルの壁面を捉え、さらに跳躍。壁面から壁面へと、赤ずきんが渡り歩いた軌跡をなぞるように、十三号車もまた空中を疾駆してみせたのだ。
上から下へと流れる重力に囚われるよりも速く、空中で車体を走らせ続けるのに必要なのは、天性のセンスどころの話ではない。

四脚とブースターの噴射角を巧みに操り、ターゲットの距離を詰めていく華怜のハンドル捌きはまさに神業と言えた。
「そこッッ！！」
横凪に振り抜いた刃は、赤ずきんを刃擦りながらも、彼女が纏うブルーシートの端を断つだけで、芯を捉えるには至らない。
だが、今ので大まかな距離感を掴めた。
「次は当ててみせるッ！」
強く壁面を蹴ると同時にブースターを吹かせれば、十三号車が赤ずきんを追い越してみせた。
リアを振った反動で車体を一八〇度旋回。ブレードを展開したまま、突っ込んでくる彼女を待ち伏せる。
「来なさいッ！　今度は私が貴女を仕留める番だッ！」
華怜には次の一撃を確実に当てられると言う確信があった。マスケット銃に弾を込める隙も与えていない。彼女の異能が発動するよりも、ブレードが首を跳ねる方が速い。
慢心なんて一つもなかった筈だ――――それなのに華怜は次の瞬間、爆風に呑まれていた。

◆◆◆

警視庁のデータベースに登録された赤ずきんの異能は「血液操作」だ。その用途は多岐に渡り、血液が付着した部位を爆破できると記録されている。
だから華怜は爆風に呑まれながらも、いつの間にか車体に血液を擦り付けられた可能性を疑った。
だが、そんな隙は与えていない筈。シミュレーター上で死亡判定を下され続けた理由だって、殆どは死角からエンジンや操縦席を撃ち抜かれてしまう不可抗力に近いものであって。自分なら血液の付着した装甲部を投棄するくらいの対策を取れただろうという確信もあった。
では、そもそもの前提から間違っているとしたら？
警視庁のデータベースに登録された情報はあくまでも、現場に残された要素から幻想人（フェアリスト）たちの異能を考察したものに過ぎず、その正否は当人にしか分からない。
赤ずきんが備える異能は「血液操作」ではなかったのだ。彼女が操作や起爆できる対象はもっと広く、その対象内に血液も含まれているのだろう。
液体の操作？
鉄分が含まれるものの操作？

思い至るものは幾つかあったが、華怜は不意にある可能性へと思い至る。

――――赤く彩られたものを自由自在に操る能力。

これが彼女の備える本来の異能であれば、不意に十三号車が爆風に包まれた理由にも説明が付いてしまった。

〈ウルフパック〉が特殊警邏車両であるが故に絶対に備えければならないパトランプ。そこから放たれる閃光は、白と黒の車体を紅く染め上げてしまうのだから。